

深谷義治・敏雄さん父子のことなど

酒井 董美^{ただよし}

11日付の深谷敏雄氏からいただいたお便りに、衝撃を受けた。敏雄氏は父・義治氏の遺品の手記や書類から無念を晴らしてほしいとの願いを読み取り、七年にわたって準備を整え『昭和の忠臣蔵』なる著書を上梓しようとしている、と書かれてあったからである。

さて、この本の主人公、大田市川合町出身の深谷義治氏（大正4年〜平成27年・享年100歳）は、昭和12年、陸軍歩兵として中国に渡り、25歳で憲兵となり、終戦後も上官命令で諜報活動が続いていた。

氏は中国人に身を変え、42歳で中国人女性と結婚。三児をもうける、次男の敏雄氏は昭和23年生まれで、今年75歳。義治氏は昭和33年42歳のとき中国公安当局に逮捕、投獄され、最後までスパイだったことを日本の名譽にかけて認めなかったため、無期懲役の刑を受



㊦ 深谷義治氏の次男・敏雄氏、㊧ 深谷義治氏

けたが、昭和53年の日中平和友好条約締結で特赦された。そして中国人の妻は敵国日本人と分かって夫を支え、三人の子どもを育て、一家そろって帰国している。筆者は二つの国の間に挟まれて運命を翻弄された一家に、言い知れぬ悲しさを覚えると共に、夫・義治氏の帰国に伴って来日した夫人の英断に、国を超えた愛情の深さを知って感動している。その後、義治氏は広島島の病院で亡くなったが、この数奇な運命をそのままにしておいてはならないと敏雄氏は、この間の事情を平成26年『日本国最後の帰還兵深谷義治とその家族』（B6判、444ページ、集英社）として出版された。そして今回企画の『昭和の忠臣蔵』は、前著で書ききれなかった内容を網羅した続編である。

ここで敏雄氏からいただいた便りの一部を次に抄出しておく。

…父は敗戦直後の覚悟について「私は軍参謀部の諜報謀略要員として負うべき、尽くすべき使命を遂行するために、敗戦後、引き続き中国の商人に化け、大陸に潜伏すべく鋼鉄のような決心を下し、20世紀の大石良雄にならんと、四十七士に劣らぬ胆略で広範なる地域と部門において22か月間に亘り、大胆且極めて綿密周到なる準備を整えたのだ」と書いていました。そのため、私は続本のタイトルを【昭和の忠臣蔵】に致しました。…私は戦争、私たち一家の悲劇が再び起きてはならないという強い気持ちで。言葉のハンディキャップを抱えながら、ボランティアの応援を受け、7年歳月を費やしてようやく本書を仕上げてきました。言うまでもなく、この一冊も父と家族の血と涙の結晶で、前著と同様に戦後史に刻み込むものだと存じます。／父の無念を払うため、それも日本国民に私たちの悲劇を知って頂けるために、一番理想のことは普通出版です。出版事情の厳しい中、なかなか容易ではありません。とにかく、今年の前半、普通出版に努力してみます。無理であれば、自费出版も視野に入れています。…

以上の事情で出版を心待ちにしている筆者なのである。（元島根大学法文学部教授）